

大学生が語る 読書案内

活字離れと言われてますが…

司会

忘羊社 藤村興晴さん



事務局を務める本のイベント「ブックオフ」では今年、県内の高校生図書委員とのコラボにも挑戦

九州大法学部3年

青江美智子さん



憲法のゼミにも参加。「高校生」のころの方が読書少女だったかも

西南学院大学法学部法律学科3年

飯村海遊さん



「法律より韓国のことにごく関心あります」

西南学院大学国際関係法学科3年

中田大貴さん



「どっかかという、社会問題中心に勉強しています」

九州大法学部3年

北岡琢巳さん



出水ゼミは「目的意識もなく入りましたが、フィールドワークに魅力を感じています」

私だって家族も仕事も欲しい。胸にこたえました 自分が男だから気づいてなかったことがズバズバ書いてある

『82年生まれ、キム・ジョン』



左から時計回りに青江さん、北岡さん、藤村さん、飯村さん、中田さん

大学生と本、切っても切れない関係だが、読書離れは近年の大学でも深刻。そんな中、学生に本を読ませることで知られる九州大の出水憲教授、西南学院大の田村元彦准教授、いずれも政治学のゼミに参加する学生4人にも、お薦めの本や自分の読書傾向について語り合ってもらった。司会を務める福岡市の出版社・忘羊社の藤村興晴さん。(構成・北里晋、写真・佐藤雄大朗)

フロムからライトノベルまで

「うちの娘は中3だけで、読んでる作家はほとんど知らない人ばかり。みなさんはどんな本を読んでいますか？」
「はい、1年間出版された中で一番印象に残った一冊から。」
飯村 チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジョン』(筑摩書房)。韓国の女性が人生で出会う困難や差別を描き、日本でも大きな話題になった本。大学の読書会でも取り上げ、衝撃を受けました。
中田 僕の本ストは金城隆一『ルポ トランプ王国2』(岩波新書)。同じ著者の『ルポ トランプ王国』も一つのアメリカを行く(同)『記者、ラストベルトに住む』朝日新聞出版の続編で、トランプ大統領誕生の鍵を握った支持者を追いかけてきた記録です。

青江 小澤英二『日本社会のしくみ』講談社現代新書。ゼミで取り上げた本ですが、新卒一括採用とか、みんな当たり前で思っていた「メンバ」がどういふ経緯でできたかなど書いてあり、目を開かれました。
北岡 橋本健二『アンダークラス』(ちくま新書)。やはりゼミで取り上げた本。副題に「新たな下層階級の出現」とあり、日本社会が過渡期に

「女性の不利な側面も構造的な問題では。」
飯村 読書会で『82年生まれ』に一番共感していたのは私たちの親世代の女性。そういうの(差別が日本にもあった)という感じが、子どもを産むかどうか迷う場面、主人公が夫に「あなたかける場面は圧巻。私だって家族も仕事も欲しい。胸にこたえました。」

『愛すること』 思ったより愛するハードルって高いな 『Re:ゼロから始める異世界生活』 主人公に自己投影できるのが魅力。学生って立場弱いし

中田 僕も読んで、精神的につらかった。自分が男だから気づいてなかったことがズバズバ書いてある。同年代の男性に読んでほしい。
青江 今は露骨な女性差別は減ったけど、見えない差別はあると思う。もっと怒らないと事態は変わらないんじゃない。でも、若い世代もあきらめてしまってる人多く、自分もその一人のような気がする。
—SNSなどで「ハイトス(いち) (憎悪表現)する身近な人っています。」
中田 そこに至るまで、周りをみてもみんな思想的なものに心がなない。そもそも他人に対してそんなに興味ないんじゃないですかね。
—(SNSで)ずっと他人の食った飯とかが見るとの(笑)
中田 他人からの視線に興味があるだけ。
飯村 韓国のことになると、やたらな人って身近にも多い。だいたいの男の人。なぜ韓国嫌いになったか聞いても、よく分からない。反論しても無駄な気がして、もう笑って流すしかない。
—そういふネガティブな感情って、ラストベルト(かつて製鉄や製造業が栄えた米国の中西部から北東部の工業地帯。トランプ大統領の支持者が多い)にも共通するのでは。
中田 彼らもどっか豊かにな中流階級だけど、今はもう仕事も出て行く先もない。そんな喪失感や脱層感(移民などへの)ハイトスにつながっているのでは。日本もそうなりかねないと感じます。

北岡 『アンダークラス』も労働階級が(正規と非正規に分割して)ひどくりにできなくなったという話。米国の状況は人ごとじゃないの。
—今日持ってきた本以外、最近個人的に読んだのは？
飯村 徳方智『オレがマリオ』(文芸春秋)とか短歌の本。今まで読んだことなかったけど、意外に気楽に読めるものなんだな。
青江 高校まで閉鎖的な環境だったせいかな本が大好きで、受験期も気にせず読んでたけど、大学に入ってあまり読まなくなりました。最近読んだのは『フロム』愛するということ(和伊国屋書店)。なかなか彼女ができない先輩が「読んで」と言っていたのを思い出して、思ったより愛するハードルって高いな(笑)

北岡 僕はライトノベル好きで、お薦めは有名ですけど、長月達平『Re:ゼロから始める異世界生活』シリーズ(RAOKORAWA)。いわゆる異世界ものって、自分の現状に満足できない人が主人公に自己投影できるのが魅力。学生って比較的位置が弱い。
—純文学は？
北岡 爽快感だけの小説や漫画と違う魅力があるの自分からいって、うーん。
中田 本を読むとき、集中力は1時間くらいしか持たない。調子にのってそのまま行けばいいけど、考えながら読む本は少ない。
飯村 正直、私も新書は休み休み読みます。
—次に読むつもりの本は。
中田 伊藤武『イタリア現代史』(中公新書)。
飯村 山崎豊子『大地の子』シリーズ(文芸春秋)。ブックオフでまとめて安く買ったので、出版した人を知りたいので、ごめんない。
北岡 義江彰夫『神仏習合』(岩波新書)。授業で紹介されたというのがあるけど、仏教と神道だけではない、いろいろな宗教が相対化できるかなという期待があります。
青江 1冊目は友達から借りた平野啓一郎『マチネの終わりに』(文春文庫)。激オシされたので読んでみよう。もう1冊は『湯浅誠』(反貧困) (岩波新書)。
—友達に本を薦めたり薦められたりは。
中田 就活が始まって本を読始めた子もいるけど、そもそも読書の習慣がないので本の話に持っていくのが難しい。
北岡 本以外に媒体がたくさん出てきて、読まなくても情報が入るので、それで満足してしまう部分があるかな。
飯村 短編だったから薦めやすい。チョ・ナムジュ『韓国女性作家の『ヒョンナムオッパヘ』(白水社)を友達に薦めた。あまり本を読まない子だったので、「めっちゃ面白い」と喜んでくれた。

青江 『マチネの終わりに』を薦めてくれた友達に、私の大好きな椋庭一樹『私の男』(文春文庫)を、勇気を出して薦めてみた。自分の好きな小説を他人に薦めるのって、自分の趣味嗜好を明示して「それでも付き合ってください」と言ってしまうみたいなもの。けっこうハードルが高かったりしますね。